

「健康で心豊かに長生きをしましょう。」(28)

平成 27 年 1 月 29 日

村山 章

「美味しいものを作るのは簡単だ。(肉類や乳製品に含まれる)動物性脂肪と甘いものでできる。飽きない味、お袋の味は難しい」と日本にチェーンシステムを広めた渥美俊一先生が、かつておっしゃっていました。世界のマクドナルドは「俺がこんなに太ったのはオタクのハンバーガーを食べたせいだ。慰謝料をよこせ」と何回も訴えられています。個人の責任ですから訴えが通るはずはありませんが、マクドナルドとしてもヘルシー志向に切り替えようと試みてはいるものの売上高は落ちるそうです。そこで結局は、動物性脂肪重視になってしまうようです。

母親は出産後まず我が子に母乳を与え、その後に離乳食を与え、1歳を過ぎた頃からだんだんと通常の食事に対応させていきます。子供が大きく健康に育ってくれることを心底願いながら愛情をこめて食事を作ります。さらに子供の喜ぶ姿を見て、嬉しくなってまた努力して作ります。子供の健康を考え、愛情を込めて作るこうした食事こそが元々のお袋の味なのではないでしょうか。食品産業において“お袋の味”は、健康に配慮したメニューの代名詞として扱われています。

コンビニならではの利便性から、コンビニ弁当が安定して売れているようです。マクドナルドのハンバーガーと同じように、この弁当にもいかに売上高を上げるかを目指した、資本主義の打算が多分に含まれています。味を濃くしたりボリューム感をだしたり、売上高や利益を上げる努力がメインとなり、そこに愛情はほとんど含まれません。

私たちはお袋が作った食事で成長してきましたから、お袋の味に飽きることはありません。そして何より体が喜びます。それは健康によいからです。元々のお袋の味には「あなたは私にとってかけがえのない存在だよ。私はあなたをトコトン守るよ」という、子供への無言のメッセージが含まれていたと思います。それが子供に伝わって、精神面でもお袋の味に大きく救われていたんだと思います。